

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(1) 子どもの笑顔後押し

2013年2月19日

インドネシアと日本の児童の橋渡しに尽力する非政府組織(NGO)のインドネシア教育振興会。「えんぴつ一本からできる国際ボランティア」をスローガンに、取り組んだ活動は十三年目を迎えた。今回は、会の活動を紹介してもらう。

多くの日本人にとって、インドネシアはそれほどなじみの深い国ではないだろう。しかし、あまり知られていないが、インドネシアは大の「親日国」である。外務省の世論調査(二〇〇八年)では、「日本は信頼できる／どちらかという信頼できる」と答えたインドネシア人は92%にのぼる。

インドネシアにとって日本は、輸出入の両面で最大の貿易相手国の一つであり、日本のアニメやAKB48の姉妹グループ「JKT48」が結成されるなど現地の若者に大人気を博している。戦時中、日本はインドネシアを植民地にしたが、戦後のインドネシア独立に際しては、二千人あまりの日本人がインドネシア人と力を合わせてイギリス軍やオランダ軍と戦ったといわれる。

インドネシア教育振興会は、〇〇年四月設立のNGOである。会の窪木靖信代表も、最初は一観光客としてバリ島を訪れた。だが、現地の子どもたちの瞳の輝きと笑顔、それと対照的な貧困生活と教育環境に強い印象を受け、手伝えることはないかという思いから支援活動を始めたのが設立のきっかけだ。

「えんぴつ一本からできる国際ボランティア」をスローガンに、当初は、日本の子どもたちが集めた文具を現地に届ける活動が中心だった。しかしその後、各種団体からの資金援助を受けて、小学校や平和図書館の建設、道徳や環境教育の教材作成など、現地の教育環境の向上に努めている。一年には、ジャワ島の南タンゲラン市に「ヒカリ小学校」を建設し、学校を運営する教育法人も設立した。

現地の人々の自立支援を心掛けているが、まだ小さなNGO。また文化の違いの壁に直面して、活動はいつも問題の連続であるが、忍耐強く活動を前に進めるしかない。

しかし、うまくいったときの現地の人々の笑顔は何にも替え難い。多くの皆さまの力添えを得て活動は十年を超え、一一年一月には、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援する公益財団法人「かめのり財団」から第四回かめのり賞もいただくことができた。これからも地道な活動を続けていきたいと願っている。

(インドネシア教育振興会理事・富山大人間発達科学部教授 野平慎二)



インドネシア・バリ島の小学校に通う現地の子どもたち

<団体情報>

団体名 インドネシア教育振興会

主な活動 インドネシアと日本の児童生徒の交流の仲立ち、寄付品の案内、現地での学校や図書館の建設、情報教育、道徳教育、環境教育、循環型社会形成の推進など

住所 富山市中滝142の9

会員数 2000人(児童・学生参加者含む)

ホームページ <http://www.baliwind.com/>

フェイスブック <https://www.facebook.com/iepfpj>

メールアドレス sb930jp@yahoo.co.jp

電話 090(3764)0583

代表 窪木靖信

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(2) ごみ捨ての意識改革

2013年2月26日

インドネシアの町を歩くと、生活で排出されたごみを多く見掛ける。それは、ごみのポイ捨てが横行している現状があるからだ。そのあしき習慣を教育で是正しようとするインドネシア教育振興会の活動を、代表の窪木靖信さんがつづってくれた。

教育振興会では現在、地球環境基金の助成を受けて、ジャワ島・南タンゲラン市の環境教育教材の開発を行っている。この活動の目的は、南タンゲラン市のごみ問題解決を中心に、生活環境改善とその教育啓発プログラムの開発と実践だ。

インドネシアは経済的にも文化的にも日本とつながりが深い国。しかし、発展途上国ゆえに生活面、経済面、教育面の格差が連動し貧困が固定化している。



インドネシアのごみ問題解決に向けて、活動に取り組むインドネシア教育振興会のメンバーら＝インドネシア・ジャカルタで

特に生活面での問題が大きく、多くの国民がごみをポイ捨てすることで処理している。そのため、ごみや廃棄物が垂れ流され、放置されているため異臭や感染症、洪水などの原因になっている。かつての包装用品は、バナナの葉など自然なものを利用していたため、仮にポイ捨てしても土に返るため問題が少なかった。しかし、プラスチックやアルミなどの容器に替わった現在ではポイ捨てが大きな社会問題になっている。

このような状態でも現地では、生活環境改善に関する知識や手引は皆無に等しく、たとえ存在していても単に「ごみは分別しましょう」という声掛けだけにとどまっているため、子どもたちや市民にごみ問題解決への意識や行動が芽生えていない。

ポイ捨てをなくすためには、子どもの段階からの意識改革が不可欠だ。また、実利を重視するインドネシアの風土では、声掛けによる意識改革だけではなく、ごみの分別と収集が実質的な生活改善(特に経済面や教育面)に結びつく仕組みの構築も不可欠である。

そこで「ごみの分別・減量・再利用」に取り組む社会起業型総合環境教育プログラムの開発・実施によって、現地の生活環境の改善、経済面や教育面での改善を現実的な形で達成したいと考えている。プログラムの開発にはマルチステークホルダー委員会(富山県生活環境文化部環境政策課、南タンゲラン市開発局、両国の教員など)を設置し円卓会議などを通して開発中である。二〇一一年にはその一環で富山大の若山育代先生をはじめ四人をインドネシアに派遣した。(インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(3) 幼児教育の国際化を

2013年3月5日

平成に入り、海外がより身近になった今日、どの分野でも国際化が進んでいます。インドネシア教育振興会の外部委員で富山大講師の若山育代さんは、幼児教育も国際化の波に乗る必要があることを訴えています。

現在、国立大学にはグローバルな視点を持つ人材の育成が求められています。私は、国立大学の一つである富山大で幼児教育の科目を担当し、幼稚園や保育所の先生になりたい学生を指導する身ですが、「グローバルな視点を持つ人材の育成」という要請に、積極的に応えたいと思っています。

その理由は、二〇一一年夏にインドネシアのセレポンを訪問して得た経験にあります。この訪問では幸いにも、現地の幼稚園に訪問する機会をいただきました。私が得たものは、富山県の幼児教育の良さと課題、海を越えて共通する幼児教育の大切な原理です。セレポンでは、あらためて私たちが幼児教育において大切にしなければならないこと、変えていかなければならないことに気づくことができたのです。



幼児教育を学ぶ学生たち=富山大五福キャンパスで

私自身がこのような経験をジャカルタで持ったので、学生にもグローバルな視点から富山の幼児教育を捉えてほしいと思うようになりました。

しかし、幼児教育を学ぶ学生にとっては「グローバル」や「国際化」という言葉はあまり身近なものではありません。なぜなら、一般的に幼児教育を学ぶ学生は、手遊びや絵本など目の前の子どもたちとの遊び方、育て方に興味を持っています。そのため、目の前の子どもから視点を移し、世界に目を向けるというグローバルな視点を持つことを自発的に行うことは、日々の生活の中で頻繁になされることではないのです。

こうした現状に鑑み私は現在、有志の学生と一緒に「国際研究会」を開いています。この研究会では、富山の幼児教育の良さを世界と比較して明確にし、それを日本中、世界中に発信していこうとしています。富山は、自然が豊かで人とのつながりが強い地域です。これから時間をかけて、富山で積み重ねられてきた幼児教育の良さを世界に伝え、広げていきたいと思っています。

(インドネシア教育振興会外部委員・富山大人間発達科学部講師 若山育代)

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(4) 現地のごみ処理深刻

2013年3月12日

インドネシアでは、ごみのポイ捨てが深刻化している。その社会問題を教育からは正しようとして、インドネシア教育振興会は現地に教育法人を設立し、小学校を開校した。現地の教育法人代表を務めるファディラ・ハシムさんが、学校での取り組みを紹介する。

南タンゲラン市は、インドネシアの首都ジャカルタの南西に位置する新しい都市である。この南タンゲラン市には、一家族の収入が一日当たり百二十五円の貧困地域クランガンを含む。

この地域に住む人々は、バイクをタクシー代わりにして人を運ぶ仕事や土木作業の日雇いで生活する。その職にも就けない人は、裕福な家庭が所有する家畜の世話をする。家畜の子が生まれたら、対価としてもらえ、売った金を生活費にしている。



ヒカリ小学校内にあるコンポスト作業場で作業する親子＝インドネシア・南タンゲラン市で

そのような貧困地域であるため、政府は教育に対して消極的だ。十分な設備がない国立小学校一校とマドラサ(イスラム学校)があるだけで、学校そのものが不足。そのため、毎年約三百人以上の子どもたちは、他の地域の学校に通うか、学校そのものに通えない状態だ。

またインドネシアでは、環境保全に対する国民の意識がまだ低い。例えば、ごみの分別やリサイクルどころか、多くの人はごみを戸外に投げ捨てることで「処理」する。南タンゲラン市も例外ではなく、ごみや廃棄物は垂れ流し状態。投げ捨てられたごみは異臭や感染症などの原因になっている。

これらの問題を解決するため、振興会の窪木靖信さんらと考えたのが現地の教育法人設立だ。二〇一〇年に助成を受けて、南タンゲラン市に教育法人を設立し、一一年には貧困地域にヒカリ小学校を開学させた。また翌年、小学校の敷地にバイオマストイレ、コンポスト作業場の設置と有機肥料作りを紹介する教材をまとめ、地域住民とともに有機農園を運営している。

インドネシアの小学校では、多少なりとも学費がかかる。ヒカリ小学校では、お金の代わりに牛やヤギのふんを学費にすることができる。作った有機肥料を持参し、代替えすることも可能だ。それでもできない家庭では、月二回生ごみから有機肥料を作る作業を対価として、子どもの学費に充てられる。地域の有機農園では、作られた有機肥料でハーブや作物を育て、出荷や良質な有機肥料として販売し学校運営に利用している。

(教育法人セマラック代表・ファディラ・ハシム)

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(5) 図書館で知恵を伝達

2013年3月19日

インドネシアの貧困地域では、基礎教育を受けた人はほとんどいない。そのため定職になかなか就けず、何世代も貧困が続く家庭がほとんど。インドネシア教育振興会では、その連鎖を断ち切るために「地域の平和図書館」をつくり、さまざまな知識や知恵を伝えています。

振興会では、南タンゲラン市の貧困地域のノンフォーマル教育にも力を注いでいる。教育の場が十分でない地域では、基礎教育を受けていない人が大勢いる。現代の貨幣経済において識字・計算能力と実生活に根ざした有益なライフ・スキルの習得は必修である。

いまインドネシアの貧民街や高架橋下の路上生活者でもテレビを持っている。良きにつけあしきにつけ、テレビ漫画やドラマ番組から感化されている。そのため、社会生活に必要な意思決定や問題解決のコミュニケーションなどがうまくできない場合が多い。

そこで、これら生活に必要なさまざまな知識や技術を習得する場として、財団から助成を受けヒカリ小学校の敷地に「地域の平和図書館」を二〇一一年に建設し、翌年二月から本格的な利用が始まった。

地域の平和図書館では本を読むばかりでなく、さまざまな利用ができる。学校に通っている子も通っていない子も一緒に地域の子ども図書館として利用している。一週間に一回は英語・日本語コースとして学ぶイベントも行われている。

大人向けには、環境保全と持続可能な生活推進のための有機肥料製作や不用品から別の物に作り替えるセミナーなどが行われている。図書館での指導は、ヒカリ小学校の教師が受け持っている。とても頭が下がる思いだ。

昨年、元国際協力機構(JICA)シニアの橋本とみ子さんを派遣して教師らにミシンでの製作技術講習も行った。今は教師らが地域の人々に製作方法を伝えている。

図書館を日本から支えているのが「ワンコイン・プロジェクト」である。五百円玉一個で名前やメッセージシール付きの本を一冊送る運動だ。お金だけの支援だと何に使われたかわからない。しかし本に支援者の名前シールなどが貼り付いていると分かりやすい。富山からの参加もお待ちしています。

ワンコイン・プロジェクト参加方法はこちらから<http://www.baliwind.com/onecoin.html> (インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)



現地の子どもたちにミシンの使い方を教える橋本さん(右)
＝インドネシア南タンゲラン市のヒカリ小学校で

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(6) 自立目指し収益事業

2013年3月26日

国の教育や生活環境を変える活動をするには、膨大な事業費が必要です。寄付金だけではいずれ賸えなくなる。それを恐れたインドネシア教育振興会は、現地でインターネットカフェなどの事業を始めて、その収益を活動に使うことを実践しています。

教育振興会では、二〇〇〇年の設立当初から活動の自立を目指している。募金や寄付だけに頼らず、同会でプロジェクトを考えて財団の企画募集に応募し、現地で収益事業を行ってきた。募金や寄付だけに頼ると、滞った時に会の活動自体がつぶれてしまう危険性があるからだ。

また現地の人から同会が“サンタクロース”と勘違いされないよう注意を払っている。願えばプレゼントが運ばれてくるスタイルでは、現地の自立や自助努力の達成を妨げるからだ。

教育の場や生活環境を変えるには何が必要か、どのように変えるのかなど現地とともに考えプロジェクトを練り上げて実行する。決して簡単ではない。時には膨大な事業費や負担金が発生する。その負担を少しでも分かち合うために実施してきたのは、現地での収益事業だ。

当初は、日本でいうインターネットカフェと観光業を十年前にバリ島で始めた。当時は固定電話の普及率が1・7%。電話がないからこそ、インターネットは貴重だった。固定電話は持っている人が少ない上に、そこに当事者同士がいないと通話できない。しかし、Eメールは留守番電話の役割も果たす。連絡したいときにメールを送り、受信も自分のタイミングで可能である。インフラが未整備だからこそ、とても重宝したのだ。

現在、インターネットカフェは役目を終え、ワゴン車からバスまでの観光業が自立して活躍している。もともと地元貢献している事業なので、利用者も地元の人が多い。しかし、私たち日本人観光客も利用できる。運転手付きの四、五人乗りの車だと十時間五千円ほどで手配でき、バリを観光できる。しかも利用金額に応じて同会に寄付されるシステムになっている。申し込みは<http://www.dptransport.com/>か同会sb930jp@yahoo.co.jpへ。観光しながらボランティアもできる新しいスタイルです。

(インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)



(上)バリ島の伝統の踊り「ケチャック・ダンス」
(下)インドネシア教育振興会が寄贈した現地観光会社の小型バス=いずれもインドネシア・バリ島で

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(7) 環境教材に立山黒部

2013年4月2日

富山県には雄大な山々が並ぶ。その富山で設立されたインドネシア教育振興会は、富山、長野両県の北アルプスを貫く立山黒部アルペンルートを通じてインドネシアの教科書で紹介し、環境問題を考えるきっかけづくりに励んでいます。

現在、振興会では地球環境基金(川崎市)の助成を受け、「インドネシア・南タンゲラン市における社会起業型総合環境教育プログラムの開発」を行っている。

インドネシア共和国は、人口二億三千万人を超す世界第四位の規模で、多くの露天商が営業するほか、道路や溝にはごみが散乱し多くの社会問題が存在する。日本でも、昭和三十～四十年代にはごみが問題視され始めたことがある。日本の各地に飲料の自動販売機が設置され始めた一九七〇(昭和四十五)年ごろには、飲料缶に缶切りを必要としないプルタブが開発され「あき缶は車窓から投げすてないでください」や「あき缶はくずかごに」などと印字されていた。当時日本の各地では、道路や線路沿いに空き缶やごみが散乱していた。

このような事実は、現在の小中学生は知らない人が多いほか、親や年配の方々でも記憶にある方は少ないと感じている。

私たちの住む富山でも同様なことが言える。ごみや地球環境に関心を持って生活しなければ、社会的秩序、モラルの維持向上はできない。県民であれば、多くの小学校行事の一環で立山に登る。事前学習や実際の登山を通して子どもたちは学ぶものが多い。「ごみの持ち帰り」や「節水」は、もはや当たり前のこと。雄山への登頂では、一列に並んだりいたわったりして、すれ違う人々には自然とあいさつの言葉が行き交う。

そのようなすてきなことを学べるのが立山黒部アルペンルートだ。振興会では、県の代表的な観光地のルートを取り上げ、開発中の教材に盛り込んだ。四季のない亜熱帯性の気候のインドネシアでは「雪の大谷」は特に目を引く。また、電気が動力源であるケーブルカーやロープウエー、トロリーバスやハイブリッドのバスなどインドネシアにない乗り物は、子どもたちの興味を引く。そして、子どもたちは持続可能な開発や秩序、モラルに関して学ぶのだ。(インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)



(上)(下)いずれも立山黒部アルペンルートのパンフレットから教材に取り入れる部分を検討するメンバーら＝インドネシア・南タンゲラン市で

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(8) 環境教育で情報交換

2013年4月9日

インドネシア教育振興会は、インドネシアの教育向上のため東南アジア諸国を回り、情報を集めています。富山大の学生の袖野麻衣さんがタイとマレーシアでの活動を報告しました。

昨年振興会のプロジェクトで、東南アジア諸国連合(ASEAN)加盟国であるタイとマレーシアに派遣された。振興会がインドネシアで開発している環境教育に関する情報交換のためだ。そこには、開発に携わっているインドネシア人の委員(大学教員・小学校教員・政府関係者)九人と日本人三人が派遣された。

タイでは国家教育省を訪れ、教育省が進める環境教育の取り組みについて情報交換した。タイでは若者の教育に力を入れ、彼らがコミュニティに戻って環境教育のリーダーとなる育成システムを進めていた。また、振興会が作成した環境教育教材についての意見交換が活発に行われた。また国際環境非政府組織では、持続可能社会を目指す哲学を中心に、学校、家庭、お寺のサークルを基本としたシステムづくりについてだった。こちらでも教育に力を入れていることがよく分かり、生徒主体あるいは学校とコミュニティが連携したプロジェクトを計画しているという。タイの幼稚園から高校までの一貫校も視察し、討論した。学校では特に、子どもたちの環境意識を高めるために、日々の行いを改めて、習慣づけることを大切にしていた。

マレーシアでは、公立小学校とイスラム小学校を訪問した。その際、歓迎セレモニーで環境保護を訴える歌で、歌詞を表した絵を見せてくれた。委員会を中心に、家庭でペットボトルのキャップや古新聞を毎週回収し、学校内でコンテストを行うなどの取り組みが印象的だった。

今回の派遣を通じて、環境教育は日々の習慣や家庭との連携が重要な要素の一つだと感じた。意識や生活を変えていくことはそう簡単ではないこと、そして、学校での継続した粘り強い教育、家庭を巻き込んだごみ分別や資源回収などの習慣づけ、節電などのちょっとした心がけの積み重ねだとあらためて思った。

学部生の時から振興会の活動に関わっており、今回のプロジェクトで体感してきたことを開発教材に生かし、子どもたちに伝えていきたい。(インドネシア教育振興会学生委員、富山大人間発達研究科二年・袖野麻衣)



現地的小学校教員と袖野さん(右)＝マレーシアで

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(9) 車いす 直接引き渡す

2013年4月16日

人気の観光地として世界各国の観光客が集うインドネシアのバリ島では、障害がある子どもたちが学校に通えないという現状に直面している。そんな子どもたちを救うため、日本の車いすを届ける活動をインドネシア教育振興会が行っている。同会の窪木靖信代表がその思いをつづってくれた。

インドネシアのバリ島へは、日本から飛行機で約八時間、降り立った先は世界的な観光地の玄関であるングラライ国際空港。しかし、ほとんどの観光客は、デンパサール国際空港と呼んでいる。数年前までは大手の航空会社しか飛んでいなかったが、最近では格安航空会社(LCC)の発着が多い。空港に着いて真っ先に待ち受けているのが入国のための長い列だ。



寄贈した車いすに乗る現地の子どもたちとインドネシア教育振興会の窪木代表(左から2人目)=インドネシア・バリ島で

飛行機の到着が重なると到着ロビーが満員となり、大変な状態になる。最近では新興国の観光客が増え、われ先にと入国審査場へ突進してくる。そこで問題なのが、順番に並ばないで、トラブルになる場合だ。まだ順番に並ぶという文化や習慣がないからだ。

次はターンテーブルでの荷物の引き取り。日本人だとわかると、片言の日本語などを話しながらポーターが近寄って荷物に手をかけてくる。もし、あなたがポーターを必要としないなら、はっきりと断る必要がある。特にツアーのタグが付いている場合は要注意。ポーターは、そのツアー名を名乗るからだ。その後、税関審査を受け、晴れてバリ島の地を踏むのである。

世界的な観光地でもあり、神々の住む島といわれるバリ島を訪れる際、私は「車いす」を届けている。それは財団法人日本社会福祉弘済会が推進している「空飛ぶ車いす」だ。

中古の車いすを日本の工業高生がボランティアで修理し、開発途上国へ届けられるリレー事業だ。私は日本の空港から現地の空港への輸送ボランティアを受け持つ。本来なら空港で現地の非政府組織(NGO)などに引き渡して終わるのだが、振興会はバリでも活動しているので、車いすを必要としている子どもたちに直接引き渡している。

世界的な観光地であっても、障害がある子どもたちの活動範囲は狭い。また学校へ通える環境ではない。今後、振興会では社会福祉士でもある富山大人間発達科学部の志賀文哉准教授と連携し現地の支援を考えていく。(インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(10) 観光、文化 富山が見本

2013年4月23日

インドネシア教育振興会は、現地の人と連携しながら教育プロジェクトを行っています。教育支援を継続的に実施しながら現地の大学と覚書を締結。振興会は、日本とインドネシアの懸け橋として活動しています。

日本企業の進出や事業拡大が続くインドネシアで十二日、ジャカルタ日本人学校の入学式が行われた。「じゃかるた新聞」によると二百二十七人が入学し、全校児童・生徒数は前年同期比百二十七人増の千七十三人となった。日本企業や日本人も増え、にぎやかになる一方で相互理解と交流は、まだまだ進んでいないと感じている。

振興会では、人と人とのつながりを重視し、現地の地方政府や大学とつながりながら協働で教育プロジェクトを実施している。スタディーツアーや現地の教育支援から国立イスラム大学教育学部と二〇一〇年に教育、交流分野での覚書を締結。現在では、南タンゲラン市の教育支援活動を協働で実施している。

支援を求めている学校や行政があっても、一般的にインドネシアの行政機関は自国や市民のためのものであっても、動きが鈍く協力的でない場合が多い。そのような中で、この地域の教育行政は改善意欲があり、協力的である。また「えんぴつ一本からの国際ボランティア」を理解し、活動の支援をしっかりと実施してくれている。そのため、教育会の活動が直接学校でスムーズに行われる。この関係を強化するために今年の六月にも覚書を締結する段取りである。

振興会が届けている内容の一つに、富山の観光や文化がある。立山アルペンルートや五箇山、八尾のおわら、環境都市富山などである。また、この南タンゲラン市は新しくできた都市であり、見本となる富山との交流を強く望んでいる。今年の十月には、インドネシアからの招待を企画しているので、協力して下さる行政の部局があれば連絡をいただきたい。

最後に今回の訪問では、パジャジャラン大の先生、ユニコム大学部長との打ち合わせ、そしてインドネシア教育大学の学生とプロジェクトの協働について話すことができた。

インドネシアの大学生はとても陽気で協力的だ。ぜひ富山の大学生と交流させて行きたい。

(インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)



インドネシア教育振興会の活動に協力する現地の学生たち
＝インドネシア教育大学で

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(11) 募金活動で小学校を

2013年4月30日

インドネシア教育振興会は、学生たちとともにインドネシアの支援を行っています。同会に参加する富山大経済学部四年で、現在アメリカのマーレイ州立大に交換留学中の中村勇貴さんが活動内容を紹介してくれました。

この留学中で、より世界に興味を持ちました。特に、発展途上国や貧困に苦しんでいる人々に対して何かをしたいと強く思うようになりました。それは、留学先の大学では、キリスト教が盛んで、何人かはアフリカや貧困地域に行き、ボランティアなどをした経験を聞いたからです。

私も帰国後、そのような国々で学生のうちに何かできることはないかと、探していたところ「インドネシア教育振興会」のホームページにたどりつきました。

自分の思いを振興会代表の窪木靖信さんに伝えたところ、現地小学校の増築プロジェクトを担当することになりました。現在、貧困地域にある小学校は三クラスで運営されており、来年度にはクラスが不足するからです。増築には約百万円が不足しており、私は「インドネシアの未来を担う子どもたちの為のプロジェクト」を立ち上げ、今年の十二月までに完成・引き渡しを目指します。

この支援プロジェクトの周知活動を広め、県民の皆さんにインドネシアと富山のつながりや子どもたちの状況を伝える活動を通して、募金活動を進めます。

そして、現地理解のためのスタディーツアーや校舎増築のための応援ツアーも企画し、見える活動を実施します。

プロジェクトの詳細は<http://www.baliwind.com/yuuki.html>から随時発信します。

このプロジェクトを企画実行できる機会を得ました。今度は私が現地の子どもたちに教育を受けるチャンスを与え、小学校ぐらいは卒業させてあげたいと思います。

部活動や留学など、自分が決めたことを最後までやり遂げる自信があり、やってきました。このプロジェクトもしっかりやり遂げ、インドネシア社会に貢献したいと考えています。

将来はインドネシアと富山県、日本の友好関係を築く大きなプロジェクトになるよう活動していきます。

(富山大経済学部経営学科四年・中村勇貴)



(上)ヒカリ小学校に通う児童たち(下)ヒカリ小学校の仮校舎=いずれもインドネシアで

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(12) 教材に飛行機の話題

2013年5月14日

インドネシア教育振興会は、インドネシアの学校教育を変えるため、教材作りに励んでいます。開発中の教材には、日本の航空会社「全日空」が登場。その理由を振興会の窪木靖信代表が記してくれました。

NPO法人の環境保全活動を支援する地球環境基金(川崎市幸区)から四月、振興会の「インドネシア・南タンゲラン市の小学校向けの環境教育プログラム開発プロジェクト」に対して、本年度の助成の内定を受けた。

東南アジア諸国連合(ASEAN)の中でも、内需拡大が進むインドネシア。国内総生産(GDP)6%台の成長を続ける国の人口は世界四位、国土は日本の五倍もあり、資源や自動車産業など急成長を遂げている。米国のコンサルタント会社によると、家賃以外の月の消費額が約二万~七万円の人々で構成される中間層が、現在の七千万人から二〇二〇年までに一億四千万人に倍増するという。

プロジェクト地である南タンゲラン市は、大手財閥企業が開発している巨大ニュータウンと、日本の大手スーパーとの合弁で巨大モールの開発が進む首都・ジャカルタの衛星都市でもある。中間・富裕層向けの高級新興住宅や商業施設が進むと同時に、建設に従事する低所得者層の住民も増えている。

人口が増えれば、ごみも増える。そして、今まで以上にごみの投げ捨てが増えるばかりだ。ごみの投げ捨ては低所得者層だけではない。インドネシアの習慣として根付いた問題で、中間層も同じだ。この環境に悪い習慣を変えるために、インドネシアの小学生が楽しみながら考え、学べる環境教育教材を開発中である。インドネシアの子どもたちは、日本の漫画や日本の物が好きであり、日本について興味がある。

そこで、日本とインドネシアをつなぐ新型旅客機「ボーイング787」を導入した全日空の協力を得て教材に取り入れた。ボーイング787が環境性や経済性にも優れていることや、全日空の環境対策を盛り込んだ。

インドネシアの教育は知識詰め込み型のため、授業中に発言する光景はあまり見られない。そこで、子どもたちが興味を引く飛行機を題材にすることで問題解決・参加型の教育に変えていきたい。本年度から富山大人間発達科学部の岡崎誠司教授の助言を受けながら実践していく。(インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)



(上)2012年11月、羽田空港から離陸する新型旅客機「ボーイング787」(下)インドネシアの環境教育の授業で使う予定の教科書裏表紙

【NPO通信】

インドネシア教育振興会(13) 堅実に活動広げたい

2013年5月21日

インドネシア教育振興会は、東南アジアの環境や子どもたちの教育などを良くしようと、今も活動に励んでいます。最終回の今回は、代表を務める窪木靖信さんが活動を続けられる感謝の気持ちを記してくれました。

二〇〇〇年に「えんぴつ一本からの国際ボランティア」のスローガンから始まった振興会は、活動十三年を迎えることができた。これは応援してくださる皆さまのおかげです。活動をやり始めたころ、インターネットが使えるパソコンは、まだまだ高価で複雑なものでしたが、今は携帯電話そしてノートパソコン、タブレットが登場して安価で簡単に取り扱えるようになってきました。

活動当初、当時の日本の子どもたちはホームページで弊会を探し当てて、手紙、ファクスや電話を使用しながらボランティア活動が始まりましたが、最近ではフェイスブックからホームページに訪問されることが多くなってきました。また以前のような手紙やファクスなどによる問い合わせはなくなり、もっぱらメールばかりで少し寂しい気持ちにもなります。

活動を支えてくれるのは、子どもたちだけではなく、スタディーツアーに参加した大学生たちもです。ツアーをきっかけに、インドネシア政府奨学金で留学したり海外勤務のチャンスを得たりと多彩に活躍しています。

主宰する私たちも頑張らなくてはなりません。インドネシアを拠点に活動のネットワークの構築を進めています。タイ、シンガポールに続いて昨年マレーシアが加わりました。貧困や環境問題など地球規模の問題に立ち向かうためには、グローバルな考え方も必要です。また、さまざまなステークホルダーとの対話も大切です。対話から妥協点やアイデアを見つけ出してプロジェクトに生かすことができます。

今後も出会いを大切にしながら、お互いに笑顔になれる活動を続けていきたいと思っています。また、少しチャレンジしながらも身の丈にあった活動を堅実にやりたいと考えております。今後とも、ご理解とご協力をよろしくお願い致します。

(インドネシア教育振興会代表・窪木靖信)



ごみが積まれた台車を引いて歩くインドネシア教育振興会の窪木代表＝インドネシアで